
夏の雪

伝次郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏の雪

【Nコード】

N7330T

【作者名】

伝次郎

【あらすじ】

真夏の暑いある日、その家の塀に空いた穴を覗いた少年。そこにあるのは、古い日本家屋と、降り積もった雪景色だった。そして、咲という女の子が、少年に声をかけてきた。

前編

アスファルトやコンクリートに囲まれたその道は、都会で生まれ育った信二にとって当たり前の風景でしかない。物心ついたときからこの沿道で遊び、小学校に通い始めて五年と少し、通学路として歩いて来た信二の庭のようなものだ。

肌に焼きつくような夏の日差しが、陽炎となって目の前でゆれている。波を打った空気の隙間に見えているのは、自宅までもう少しという所にある、大きな家の長いコンクリートの塀だった。

「こんな穴あつたっけ……」

今まで気がつかなかった穴が、塀の中ほどにぽっかりと空いていたのである。

真っ黒に焼けた顔を近づけると……。

信二の目がかつと開いた。そして何度も瞬きしてから、穴の向こうを凝視した。なぜなら、穴の向こうが真っ白い雪景色だったからだ。

一軒の家が、舞い落ちる淡い雪の中に浮かんでいた。古い木造のわらぶき屋根に、分厚い雪が積もっている。そして広い庭園も、まるで映画でも観ているように、白雪の瞬間を刻んでいるようでもあった。

穴から目を離すと、そこには暑い夏が現実として存在している。太陽が照りつけるアスファルト。目が眩んだのか、それとも陽炎のせいなのか、夢と現実が混同しているようでもある。

信二は何度も交互に目をやった。

「ここは、瓦屋根の大きな家……」

だったはずだ。自宅の二階にある信二の部屋の窓から、この家が見えているのだ。

自分の頬に爪を立てて、痛いことを確認した信二は、しっかりと穴に目を寄せた。

庭の中ほどにある池のほとりに、小学生らしい女の子がしゃがんでいた。まっすぐに伸びたおかつぱ頭に、粉雪がきらきらと光っている。白い肌に紅いほっぺが可愛らしい。そして今では珍しい、赤い地味な着物姿だった。

女の子がゆつくりと振り向いて、信二とその視線が重なった。そして信二が来るのを待っていたかのように、泣いていた顔から笑みがこぼれたのである。

「——こらっ、何しとる！」

焼けた熱いアスファルトの上に立っているお巡りさんが、怖い顔をして睨んでいた。悪いことをしたという意識はなかったが、信二は一目散に駆け出していたのだった……。

窓の外は、いつもと変わらない町並みが広がっている。

信二がぼんやりと眺めていたのは、今日、学校の帰りに覗いた、この街では珍しいあの大きな屋敷である。木造ではあるが、近代的な日本家屋。広い庭園は、鮮やかな緑に輝いていた。

「どこにも雪なんか積もってないじゃないか。それに、あの女の子……」

何とももどかしい気分で、穴の中に見えていた雪景色を、信二は思い出していた。

ここ数年、あの家には老人が一人で住んでいるらしい。妻を早くに亡くし、社会人になった子供たちはそれぞれに家庭を持ち、この家から出て行ったという。夕食の支度をする母に、信二はくどいほど訊いたのだった。

次の日、その家を訪ねることにした。応対に出たのは、やはり一人の老人だった。

穴の中の雪景色。そして女の子の話をすると、疑うどころか、逆に目を輝かせていた。

「そうか。それは不思議な話しだね」

「覗き見して悪いと思っただけど……。でも、泣いてたんです、その子。気になっちゃって……」

「何か話をしたのかい？」

老人にそう訊かれたが、いいえ、と答えた。もし声をかけたら、その子は驚いて逃げるかもしれない、と思っていたからだ。そして、

「そうか、赤い着物か……」

と、老人は呟いていたのだった。

——帰り道、信二は穴を覗いてみた。人の気配はない。しかし、相変わらずの雪景色。

「今日は遅かったのね」

突然声がしたと思うと、穴の向こうに大きな瞳がギョッと現われた。

「うわっ！」

信二がびっくりしていると、

「昨日も来てたでしょ。知ってたのよ。お話したかったのに、すぐ帰っちゃうんだもん」

「ごめん、覗き見して……」

その瞳が少しずつ退がって、女の子の顔がはっきりと見えた。

「あなた、名前なんていうの？」

「ぼく、信二。——君は？」

「私、咲。私の名前みたいに、早くこの雪が解けて花が咲くのを待ってるの。春になったら、この庭はお花畑になるのよ」

咲はそう言って、楽しそうに笑った。

それからの二人は、幼い時からの友達のように、いろんな話に花を咲かせた。

信二より一歳年下の四年生であること。この家を、いや、自分の故郷をこよなく愛していること。そして、ひたすら待っている人がいることを……。

早くゆっくりと眠りたい……。と、咲は言った。そして、早く帰

って来てほしい、と……。

おやすみ、と言った信二が穴から目を離すと、そこは蒸し暑い、灼熱の町並みが広がっていた。

後編

学校の帰り道、その家の老人と会うことが、信二の日課となっていた。自分から訪ねることもあったが、穴の近くで老人が待っていることがほとんどだった。

そしていつも、咲のことを訊いてきた。

穴を覗いてごらんよ、と言っても、老人にはそこにある近代的な日本家屋しか見えないらしい。老人がおかしいのではなく、雪景色の古い建物が自分だけにしか見えていないことは、信二もしいに感じていた。

ある日、その道に出たとき、信二の目に飛び込んで来たのは、工事関係と思われる人たちや、道一杯に広がったトラックやショベルカーといった重々しい物体だった。地面を揺さぶるような振動が、信二の身体に伝わってくる。

信二は、作業着姿のおじさんに訊いてみた。

「何やってるんですか？」

「坊や、危ないよ。あっちに行つてな」

小学生の信二から見れば、そう言つたおじさんは、学校の先生よりも怖い存在に思える。

開け放たれた格子門の中に見えたのは、ショベルカーの爪が、老人の住んでいた建物にくい込む瞬間だった。

おじさんがいるはずだ。それに……。

塀の穴に駆け寄つて中を覗くと、両手で顔を覆いながら泣いている咲の姿が見えた。しかも身体の半分は、降り続く雪に埋まっている。

「咲ちゃん！」

信二は大声で叫んだ。すぐに気がついて、咲は振り向いた。

「信ちゃん！ お願いがあるの。どうしても伝えてほしいことが――」

咲の声だけが、信二の中で響いていた。

しかし、信二の身体は、いつの間にか作業着姿のおじさんに引きずられていったのだった。

どうしてもつと早く教えてくれなかったんだろう。

おじいさんが病気で入院してしまったこと。退院後は、息子夫婦のところに住むことになっているという。そしてあの家は、すでに売却してあるということだった。

おじいさんに会わなきゃ……。

咲ちゃんとの約束だ。どうしても伝えなければならない。

「おじいさん、どこの病院にいるの？」

学校から帰った信二は、カバンを放り投げて、母に訊いたのだった……。

病室のドアをノックした信二は、返事を聞いて、ゆっくりとドアを開けた。おじいさんが寝ているベッドの横に、息子夫婦と思われる二人がいる。

「おお、坊やじゃないか。よく来てくれた」

老人が、布団の中からシワシワの手を少しだけ覗かせた。

その顔は、幼い時の友人に会った時のような喜びに満ちていた。

信二は近寄って、声をかけた。

「おじいさん、大丈夫？ あのね、咲ちゃん――」

信二は、今まで見てきたことを伝えた。家が壊されていることを話すとしょんぼりしていたが、咲のことになると、目を輝かせて肯いていた。

「待ってる、って言うてました。咲ちゃん、雪の中で待ってるからって……。おじいさん、どういうこと？」

信二は老人の手を握った。

「咲はね、わしの奥さんなんじゃ。ずっと昔——そう、結婚して間もなくして、病気で死んでしまったんだ。あの庭で……雪に埋もれてな」

老人は遠くを見つめながら、何かを思い出すように言った。

「咲ちゃん、僕より年下だって言っていました」

「ああ、そうだな。彼女はあの年のころが一番楽しかったと言ってたな」

「おじいさんは、僕が咲ちゃんと話してること、知ってたの？」

「もちろんだよ。純粋な心があるから、咲の心が通じたのかもしれないね」

老人は信二の手を弱々しく握った。

「咲ちゃん、大丈夫なのかな。寒くないのかな」

信二は心からそう言った。

「大丈夫。心配せんでもいい。もうすぐわしが、咲のところに行くから」

そう言って、老人は手ぬぐいで涙を拭いた。

——帰り際、信二は聞いていた。老人が息子に話しているところを。

「わしの骨は、実家の、婆さんと一緒に埋めてくれ。婆さんが待ってるんだよ」

そして、都会の新しい墓地はいやだ、と……。

まだ生きてるじゃないか！ そんな話するなよ！

信二にはまだ分からなかった。そして、子供であることが悔しかったのである。

幾日か経って、信二はあの家に行ってみた。

もちろん建物は残っていない。しかし、なぜか穴の空いた塀の一部だけが、忘れられていたかのように残っていたのである。

信二はためらいもなく目を寄せた。

あの時のままだ。いや、積もった雪はそのままだとしても、太陽

の光が差し込んだ庭のいたるところに、新緑の若葉芽吹いている。そしてその家の縁側に座っているのは……。

数日前に訃報を聞いた、老人の姿がそこにあつた。

あれ？ 隣に笑顔で座っているおばあさんは……。身に着けている赤い着物は、咲が着ていたものと同じだ。そしてあの笑顔。

「——咲ちゃん、よかったね」

このコンクリートの塀は、明日にでも取り壊されるのであろう、その方がいい。やっと二人つきりになれたんだから……。

——自宅近くのコンクリートの塀に、小さな穴が空いていた。

覗いてはいけなそうと思ひながら、信二は丸い瞳を近づけていた……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7330t/>

夏の雪

2011年6月2日18時10分発行